

「HSK 季刊わたぼうし」 第48号

発行者:わたぼうし連絡会
発行日:1999年(平成11年)6月1日 '99 夏号

第48号のテーマ 「私の外出体験Ⅱ」

計算機などは いない ボランティア

比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

テーマ・私の外出体験Ⅱ

今回も、障害者の外出について考えます。今回はこの連載を通して皆さんのご意見、感想を通して紙面作りをしたいと思っております。一方通行ではなく、対話のできる機関紙を目指しておりますので、どしどしご意見をお送り下されれば幸いです。インターネットのEメールでもご意見を受け付けます。Eメールのアドレスはzen@san9.netです。

外 出

地域住民・肢体障害

外出の方法といえば、母に抱きかかえられてもらって車いすに乗せてもらっての散歩となり、また遠出といえば自宅の車での移動です。

遠出の車での移動となると、当然ですが足と胴体を抱えて乗り降りするのですが、いくら体重が軽いとはいえ身長も人並みにあるのと、何よりもつかまることができないので、余計に抱きかかえるのも重くて大変だろうと思います。

ある日「羽咋ボランティアセンター」を通してボランティアの方々と付き合いをしてもらうようになりました。とは、いうものの"殆どが話し相手をしてもらった"といった方が良いのかも知れません。

いろいろな話の中にも、時にはイベントなんかの誘いもしてくれたりと家の中ばかりだと絶対に入ることのない大切な情報源となったのは間違いありません。時々、車いすに乗ったままでも乗車可能な市のリフト付きカー(友抱号)で、外の世界に出られる機会を作ってくれたのでした。

以前の生活パターンを考えると随分と行動範囲も広がって、面倒な移動に悩んでいる暇なんかなくなってきたのでした。そうして後に「羽咋市訪問看護ステーション」の”ヘルパーさん”と”訪問看護婦さん”のお世話になることになったのです。”ヘルパーさん”と”訪問看護婦さん”とが入れ替わりに月2回、2時間ずつ家に来てもらっています。

何かと助かったことがたくさんありますが、中でも大きな問題といえば『歯医者』の件です。歯の痛みは数年間、家庭薬を飲んで歯の痛みをだましていたのです。それが、ヘルパーさんや訪問看護婦さんに相談したところ、案外すんなりと市のリフト付きカーで(友抱号)で、行けることが分かったのでした。歯科医院の玄関の階段も、持ち運びのできるスロープを用意してくれて中に入ることができて、無事に治療してもらえたことで、今まで歯の痛みと付き合っていたのが嘘のようでした。

後は、年に一度の「花見や買い物体験」も予定してあって、世の中の動きを体感をしながら人とのふれあいが、とても貴重だと感じています。

家の周りでの散歩も付き合ってもらっているのですが、四季の景色を見ながらの散歩はもちろん、外出は最高の気分転換と運動不足の解消になるのです。こうした沢山の方々の支援を得て外の世界へと出没しているのです。

学生の頃、車いすのKさんが県立中央病院へ行くのに介助をして行ったことが何回もありました。夏の暑い盛りなのに延々と病院までの道を歩いた記憶があります。それなりにいろいろとおしゃべりしをしながら歩いていて楽しかったのですが、どうしてバスや電車に乗っていかないのかなと言う素朴な疑問がありました。それで一度聞いてみたのですが、Kさんは「いやだ、乗ると嫌な思いをするから……」とっていました。

確かに以前、バスに無理矢理狭い入り口から乗り、かつ狭い通路を塞ぐような形で乗り込み、その乗客からは「何で乗るんだ」と言われ、運転手からは「時間が掛かる」からと言われ、ひどい罪責感にさいなまされたことがあります。また、バス停で車いすの人と待っていると、バスが止まらずにスーッと行ってしまったこともありました。

あれから15年以上経ちました。果たして、富山の公共交通機関(バスや電車)は車いすのまま乗りやすくなっただけでしょうか。障害を持つ人は外出しやすくなったのでしょうか。

富山では、2年前に富山市内の一部区間(県立中央病院～西町～富山駅～富山東駅～高志リハビリ病院)でワンステップ低床バスを運行しています。実際に車いすに乗っている人や歩行器を使っている人と試乗してみました。

実際に使用してみると、宣伝されているよりも不備な点も良い面もいろいろ見えてきます。まず、不備な点は、停留所の形態が全部違うので乗り降りが不便になることが多いこと。また、スロープが急であるためバスへの乗り降りが大変なこと。それと横へ落ちそうで怖いこと。車いすスペースが1台分しかなく、2台以上になると通路を全く塞いでしまうこと。いつも低床バスが来るとは限らず、いったい何時何分のバスが低床バスなのか分かりにくいこと。バスは相変わらずワンマンカーなので、運転手さんが降りてスロープを引き出し、乗降を介助し、車いすの固定をし、スロープをしまうという、仕事とはいえ運転手の負担が大きいこと等々、たくさんありました。一方良い面というか、驚いたのは、運転手さんが「せっかく障害者の方に利用してもらうために導入してバスなので、どんどん利用して欲しい」とおっしゃって居られたことです。変わったのだなと実感しました。

障害を持つ人が外出する際にはいろいろな障害があります。富山弁ではよく「きがねする」と言います。外出を「きがね」させるいろいろなもの、それを一つ一つ取り除いていくことが私は必要ではないかと思えます。そして、「きがねなく」外出できるようにするには、周囲の我々がどんどん受け入れられるように変化しなければいけないのだと思う。

私の外出体験

地域住民・肢体障害

「私の外出体験」というテーマだそうですが、私は毎日、家から外に出ているので、何を書けばよいのかわかりません。簡単に日常的なことと遠いところへ出かけたときのことを書いてみます。

私はいつもは、自動車か電動車いすで外に行きます。行き先は、共同作業所「富山生きる場センター」と買い物に行くスーパーマーケットが日常的な外出です。

買い物は「富山生きる場センター」から帰る途中にあるスーパーにだいたい決まっています。車が止めやすく、玄関の段差のない所、また、店の人の雰囲気が良いかどうか、私にとっては大事なことです。それは、買い物をしてお金を払うときにレジの人に財布を渡して、お金を取ってもらうのと、品物を袋に入れてもらうからです。私が、いつも行っている所は、もう顔なじみなので、署名集めの時に頼んだりもできるようになっています。たまに他の所にも行きますが、やってもらうことは同じです。

後、介護者がいるときは、手動の車いすで動きます。遠くは、歩けないので車いすと介護者は必要です。遠くに行くときは、電車か飛行機を利用しますが、両方とも、あまり私たち「障害者」の言うことを聞こうとしません。特に飛行機の中と言うよりも、空港の人たちと言った方がよいでしょう。もう、どういう対応か分かっているので、私は、介護の人に「そばにいないで離れていて」と言って、私一人になるように心がけています。それでも介護の人を探すので「トイレに行った」とか適当に言って時間を持たせます。航空会社と話し合いの機会があれば、絶対にこのことを言いたいと思っています。昔から見れば、今の世の中「障害者」にとって生きて行きやすくなったと言いますが、私から言えば、確かにある部分ではそうだと思いますが、外出に関してはまだまだだと思います。店の人たち、交通機関の対応はまだ「障害者」は、何もわからない者として見ていることが多いように思います。しかし、どんどんみんなが外に出て行くことによってしか、対応は変わらないと思います。

私の外出体験

地域住民・肢体障害

私の病名はリュウマチで、子どもの時から全身の関節が変形していて不自由です。歩行は両松葉杖を使って何とか歩いていますが、階段や、高さ15センチ以上の段差は、やはり障害になります。だから、市内を走るバスには一度も乗ったことがありません。最近では段差のないバスも何台か走っているようですが、私は、まだ見たことがありません。

それで少し遠いところへ行くときはタクシーになるのですが、去年は私が病気になって病院へ通うことが多かったので、私と妻が市からもらっているタクシー割引券30枚つづり、2冊を、10ヶ月で使い切ってしまいました。

段差といえば、駅の階段にも困ります。

金沢駅にはエスカレーターがありますが、あれは乗るときと下りるときが怖いので使ったことがありません。エレベーターがあると助かるのですが、金沢駅にはあるのでしょうか

か？

もっと列車が利用しやすくなれば、障害者も旅行が楽しめるのですが。

バリアフリーが叫ばれて、障害者に対する社会の理解もかなり進み、公共の施設には車いす用のスロープが設けられているところも多くなりました。我が家の近くに警察の交番があり、そこにもスロープが付けてあって感動しました。

それでも、重度の障害者が一歩外へ出れば、今も不便なことだらけです。つい外出が億劫になりますが、私は頑張ってお出かけのようにしています。いろいろなものを見たり、体験することは、やっぱり楽しいですから。また、そうすることが社会の人たちにも、障害者がこういう場所で不便なのか、知ってもらえる機会になるでしょう。

編集者より

今回、皆さんの原稿を編集していて感じたことは、行政や公的機関に対する要望など出てくると思っていましたが、日常生活に関する意見が多かったのが驚いています。

私たち障害者が外出することは、重労働なことです。だからといって、閉じこもっては周囲は変わっていかないと思います。大いに出て行きたいと思います。

しかし、交通事故には気をつけましょう。皆さんの中で怖い体験がありますか？その時の体験談などをお寄せいただければ幸いです。

次号は2回の記事を読んだ皆さんの感想、ご意見を掲載したいと思います。皆さんの感想をどしどしお送り下さい。（Z.O）

青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜訪問記

セルプ・社会就労センター「青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜」を訪問して
障害者支援施設

・利用者 編集委員

能登地方で初のセルプ・社会就労センター「青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜」が平成9年6月に開設して早2年が経過しました。「HSK季刊わたぼうし」の編集者として訪問したことを報告したいと思います。

七尾から国道249号(七尾~田鶴浜バイパス)を高田インターで降り、田鶴浜町吉田地区へ向かうと、周囲を豊かな自然に囲まれ、田畑の中にピンク色の建物が見えてきます。建物はそれほど大きくないが、設備はバリアフリーになっていて、車いすの方でも作業ができるようになっています。

建物より一歩出ますと、周囲には大きなハウスが11棟並んでいます。このセンターが主としている作物は水耕ネギです。3棟のハウスでは、水耕ネギの水、肥料などがコンピューターで管理され、播種から60日程度で出荷される状態になります。ほとんど人手によらず自動化されて栽培を行っています。

出荷ができる状態にまで生長したネギのゴミなどを取ったり、刃先を切り揃えるなどの手入れ、店頭販売の袋詰めなどがセンターを利用している方々の主な作業となっております。私が訪問させていただいた時には、仲間同士で和気藹々と世間話をしながら、楽しく作業が行われていました。

七尾鹿島地区の福祉施設、和倉温泉の旅館、スーパーマーケット、食品加工業者などに毎日、商品名を「ネギ美人」と名付けられて出荷されています。

他のハウスでは季節に応じてメロン、野菜苗、花苗が栽培され、市場に出荷しています。特に冬場はシクラメン、フリージアなどの栽培を盛んに行っております。

他の作業としては、商品券の箱折り、箱詰め等や竹で細作業も行っており、ザル、ソーケ、花籠などの作品を作り、販売しています。

今回の取材を通して、同じ青山彩光苑の仲間が、生き生きとした姿を見て、私も頑張っ

て皆さんに喜ばれる紙面を作っていこうと思いました。

これからはもっと外に出て、情報を集めて紙面作りに頑張っていきたいと思います。

あとは「ワークセンター田鶴浜」の方に、施設の紹介をお願いします。

セルプ・社会就労センター「青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜」の紹介 青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜

「青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜」では、各種作業を通して就労の訓練を行うとともに働く場として、身体の障害のある人への「自立生活」を支援しています。作業内容として、水耕ネギ(ネギ美人)の栽培出荷、春先には野菜苗の出荷、季節に応じて作物の収穫出荷、花壇準備、プランターリース、軽作業等を行っています。

皆さん知っていますか？

ガーデニングが静かなブームを呼んでいます。この機会に一度チャレンジしてみてもいいですか。そんな声にお応えするのがワークセンターです。年間を通して花を提供できるように計画実施しています。難しく考えずに気軽に一緒にやってみませんか？

問い合わせ先

・セルプ・社会就労センター「青山彩光苑・ワークセンター田鶴浜」

電話0767-68-3112

新企画・私のホームページ

このコーナーは福祉関係の情報を発信している方々のホームページを紹介します。あなたのホームページの紹介を600~800字程度にまとめ、表紙(トップページ)の画像ファイルを添えてEメールでお送り下さい。

ホームページ「麦わらぼうし」

ホームページアドレス <http://www1.0dn.ne.jp/~caa12890/>

地域住民・肢体障害

自分で確かめた情報を

これまで、いろいろな福祉マップ見てきましたがあまり参考になりませんでした。というのもそれを参考にしていって見ると自分にとって使いにくかったり、イメージしたものとだいぶ違ったりしてガックリしてしまうことが多くあります。障害者だからといって設備の使い勝手が皆同じとは限りません。ある人にとっては使いやすくて他の人にとっては使いにくいということは誰でも経験したことがあると思います。

私と彼女(一緒に暮らしています)で、自分で確かめた、使用してみたホテルや交通機関などについてインターネットで紹介していこうと、「麦わらぼうし」というホームページを作って2年近くになります。インターネットの強みは画像だと思います。私が良かったと思っても他の障害者の人たちにとっては使いにくいかもしれないと思い、デジカメを買って全国いろいろなところに行く機会があるので取材して、その時の画像をいろいろな人に見てもらい判断してもらおうと思ってホームページを作ってきました。

型にはまった情報はもういない

何となく、福祉とか障害者というと型にはめられたような情報しかありません。全国にさまざまなことに取り組んでいる障害者自身の団体や個人がいます。都会と地方では障害者自身の生き方の違いや制度的な違いなどがあり、そうした違いの中で地方でも活用できるものや「あったらいいな」と思えるものもあります。

障害者自身が情報や制度を選択し自分の生き方の参考に

自分の住んでいるところに「無い」からといってあきらめることはいやですね。自分には自分らしい生き方をしたいと思っている方も多いと思います。そんな人たちにできるだけ様々な情報を提供し、人生を謳歌するためのホームページを作っていきたいと考えています。いろいろなご意見を下さい。

ピア・カウンセリング ハート相談室

TEL&FAX 0762-267-1181

ハート・ワーキング・センターとハート・サイド・ネットワークでは共同してピア・カウンセリングを開始します。障害をお持ちの方やその家族の方の悩み、自立への取り組みに積極的に関わり、問題の解決を目指したいと思います。

相談日 毎週火曜日と金曜日 午前10時～午後4時 相談は無料ですが、予約が必要です
ので、必ず事前にご連絡下さい。

カウンセラーの紹介

中村 裕(なかむらゆたか)

1957年 金沢市生まれ

1990年 造園業を自営しているとき、樹木伐採中に転落。頸椎を損傷して、首から下がマヒ、車いす生活になる。

1992年 入院リハビリ後、バリアフリー住宅を新築し、自宅に戻る。

1994年 友人たちと「やさしい街づくりと障害を持つ人たちの自立を目指す市民の会＝ハート・サイド・ネットワーク」を発足させ、事務局長に就任。

1995年 佛教大学社会福祉学科通信課程3年に編入(1997年に卒業)

1998年 障害を持つ人たちが自主的に運営する小規模通所授産施設「ハート・サイド・ネットワーク」を発足させ、運営委員長に就任。電動車いすサッカーチーム「金沢ベストブラザーズ」選手としても活躍。カウンセラーの相談業務を支えるためにアドバイザー・スタッフがサポートします。

スタッフの紹介(1999年4月現在)

- ・寺本 紀子(ボランティア活動研究所)
- ・高山 紀子(保健婦)
- ・長沼 理恵(保健婦)
- ・鷹西 亘(社会福祉士・車いす利用者)
- ・赤井 好美([有]・ひのき家常務取締役)
- ・須戸 哲(ボランティア活動研究所所長)

相談の申し込み、予約は

ハート事務局

〒920-0345 金沢市藤江北1-32-1

電話&FAX 076-267-1181

みんなの広場

白くて長い杖

地域住民・養護学校教員

ここに一本の白い杖があります。「はくじょう」と呼ばれています。長さは普通持つ人の胸の高さぐらいです。視覚障害者は、この白杖によってこれから歩く道路のあらゆる情報(障害物や段差など)を知るのです。さらにもう一つ、白杖を持って示すことによって、他の人たちに、視覚障害者であることを知らせ歩行に気をつけてもらうことが、できるのです。では、この便利な白杖(もちろん、訓練によって使い方を会得するのですが)を持って、道路を歩けばいいと誰もが思いますね。

しかし、この一本の白杖を持つことには、人には大変なためらいと抵抗があることを、私は、9年間の盲学校勤務の中で知りました。特に以前は良い視力を持っていたのに、急激に伯下した人や、思春期で他人の目を気にする若者たちにこうした傾向が顕著にあるようです。白杖を持って示せば、自分が視覚障害者であることを自ら認め、保護される気持ちへのためらいが、あるからでしょう。だから、敢えて持たない生徒がいたこと、そして道路脇の側溝に落ちてしまったり、空中に飛び出している標識の看板などにぶつかってけがをしてしまったことがありました。私が盲学校の教員であった時(今春、私は転勤しました)歩行訓練で、一番気を使ったのは、実はこの白杖を持つまでの本人の気持ちでした。中には、私の前では白杖を使っているけど、いざ、私のいない人混みや、人の目の立つ所では、白杖を隠してしまう生徒もいました。視覚障害を持っていることを他人に知らせることへの抵抗感をなくし、白杖を堂々と持つことができれば、歩行訓練は、70%は完成されたと言っても過言ではないと私は思うのです。心の垣根を取り除いて頑張ってくださいね。S君!Tさん!

マイ・ブックスルーム1

アンソロジー朝のおと

地域住民・ラジオパーソナリティ

北日本ラジオ(768khz)の番組『ラジオで茶!ちゃ!チャ!ビタミンわいど』は月曜～金曜の午前9時から11時の時間帯で、1995年4月から99年3月までの4年間放送しました。

その中で『ラジオ文芸』は詩歌全般にわたるものだったが、投稿者が増えるにつれ、視覚障害者の俳句を中心とした作品が多くなったので、表題のコーナーで紹介してきました。

句会や歌会に自由に参加できない視覚障害者の皆さんにとって、番組に寄せる期待も大きく、スタジオ句会や自宅訪問交流の機会を作り応援してきました。

その間、投句者の一人である北本隆三さん(高岡市)の挫折から自立への軌跡を描いたドキュメンタリー「杯にひとひらの花……ある中途失明者と妻の記録」が、平成10年度芸術祭ラジオ部門優秀賞ほか数々の受賞の栄誉に輝き、多くの人々に感動を与えました。詩歌は音声によって表現するのが本来の姿であり、視覚に障害のある方々と共有できる舞台の一つです。もちろん盲人以外の障害者の方々にとっても、積極的に社会活動へ参加し、生きがいある豊かな社会生活を営むための手だてとして、音声メディアを介し、文芸の創作発表に参加していただくのは喜ばしいことです。

『ビタミンわいど』の番組が終わるに際し記念として、皆さんの作品の成果をまとめ出版することを思い立ち、同時に「杯にひとひらの花」の台本も併載いたしました。この本と放送のことを全国の人々に知っていただくため、ボランティアの協力で点訳ライブラリーに登録、「ないーぶネット」を通じ鑑賞できる手筈も整えました。

登場する12人の方々が楽しみながら作った「心の果実」を味わっていただければ幸いです。(定価は千円、希望者は北日本放送まで)出版社：北日本新聞社まで

著者：R.M

「アンソロジー朝のおと」との出会い

障害者支援施設 利用者・編集委員

私がこの番組と出会ったのは、在宅生活を始めた昨年の4月でした。毎日の情報源として、聞いているうちに親近感がわいてきました。

「ラジオ文芸」に一度は投稿したいと思いながら、一度もしないで時間が経ちました。今年の春にこの番組から本が出版されることを知り、パソコンの仕事をいただいている「富山生きる場センター」を通じて購入しました。

本が手元に届き、読んでいくうちに、「HSK季刊わたぼうし」に紹介したいと思い、番組に送付しましたら、著者でありパーソナリティさんより温かいご返事と紹介文をいただきました。ありがとうございます。ここに深く感謝申し上げます。なお、アンソロジーとは「詩華集」という意味です。

マイ・ブックスルーム2

五体不満足

著者：乙武 洋匡

出版社：講談社 定価1,600円(税別)

「障害は不便である。しかし、不孝ではない」(ヘレンケラー)その言葉を見事に実現して見せてくれる人たちがいる。星野富弘さん、レーナ・マリアさん、そしてこの乙武洋匡さん……。

「人に迷惑をかけないように」と教わる一方で、「他人を助けることは美德」と思われてきた。けれども、他人に支えられずに生きている人など誰もいない。ただそれが見えにくく気づかずにいることが多いのだ。

この人たちは、自分の価値を正しく知っている。そうして私たちは、その輝きに触れることで多くの勇気が与えられ、励まされる。

ただの「感動」で終わるのではなく、これからの自分のものの見方、考え方の「参考」にしていけたら、と思う。そうすれば私の心のバリアも少しずつ消えていってくれるかも知れない。

(文)県立七尾養護学校教諭

ボランティア団体を紹介して下さい。

福祉活動を行っているグループ、ボランティア団体の紹介して下さい。活動内容、紹介文を600~800字程度にまとめ写真等を添えてお送り下さい。

編集後記

皆さん、こんにちは。再出発号の第2段をこんなに早く発行できることを感謝いたします。最近、障害者、福祉関係の情報誌、雑誌が相次いで廃刊になっています。その理由は景気低迷による広告収入の減少だそうです。

自分には関係がないと思っていた景気のニュースが身近なものになってきています。このようなときにこそ求められるのは、質の高いものでしょう。

当機関紙も読みたくない紙面ではなく、読みたくなるような紙面を目指していくことを目標に頑張っていきたいと思っています。皆さんのご協力をお願いいたします。(Z.O)